脱コロナ禍にむけて！！

コロナ禍が明けようとしています。3月13日から、市役所内でのマスク着用については、窓口対応する職員を除き原則自由としています。あわせて、窓口のつい立も撤去しました。はじめのうちは戸惑われる人もいましたが、市民の皆さんも徐々に気にならなくなっているようです。今後もコロナ禍前の生活にもどすために制限を少しずつ取り除いていくこととしています。

「住みたい田舎ベストランキング」

さて、1月4日のさきがけ新聞に「23年版住みたい田舎ベストランキング…人口20万人以上、参加38自治体中…秋田市、総合部門1位」という記事が掲載されました。

このランキングは、宝島社が全国の自治体から回答されたアンケートを集計し、月刊誌「田舎暮らしの本」2月号にて毎年発表している企画です。お伝えしたいのは、にかほ市も秋田市に見劣りしない結果だったということです。

今年からランキングの内容が変わり、人口規模による分類となりました。にかほ市は2～3万人規模の市町グループに入ります。にかほ市はそのグループの中で、総合部門で第9位、子育て世代部門で第6位、若者世代・単身者部門で第8位、シニア世代部門で第19位となっています。

また、東北地方全体での結果も公表されており、人口規模に関係なく、にかほ市は東北総合で第7位、県勢の中では秋田市に次いで第2位となっています。

にかほ市が、東北総合のトップテンに初めて入ったのは4年前でした。このことは4年前の市長コラム「魅力ある地域づくり（№7）」でも取り上げていましたので覚えている方もおられるかと思います。それ以来、にかほ市は東北トップテンから外れることなく、常に魅力あるまちとして高く評価されています。

これまでの取組みのあらわれ

3年間のコロナ禍による行動制限の間に、市はアフターコロナに向けた準備をしてきました。もちろん、コロナ禍以前から計画してきた事業もあります。ただ、アウトドアアクティビティ拠点のように、そもそもが市を活性化させ、多くの人に選ばれるまちを実現したいとの思いではじめた取組みが、アフターコロナの方向性と相まって、その意味合いがさらに強まっているものもあります。

また、にかほ市への移住者がここ数年増えてきていますが、そのアンケート結果に、にかほ市を選んだ理由として、「自然豊かな環境」や「良質な子育て環境」が多数上げられており、これまでの市の取組みやPR活動などの効果が徐々にあらわれはじめていることをうかがい知ることができます。「住みたい田舎ベストランキング」へのランクインはまさにそのあらわれと言えます。

あらためて取組むべきこと

他方で、コロナ禍の3年間に最もがまんを強いられたのは、重症化リスクの高かった高齢者の皆さんでした。コロナ禍による外出自粛によって、集落サロンや老人クラブ活動など、高齢者の皆さんが楽しみにしている地域イベントが軒並み中止されました。市も敬老式などを中止し、公民館等の公共施設も長期にわたり閉鎖しました。多くの人の心が沈んでいくのが手に取るようにわかりましたが、かと言って行動制限はしなければならず、苦しい選択の連続でした。

私は、かつて福祉現場で働いていたときに、「ふつうに暮らすことの大変さ」を強く感じることがたくさんありました。特に高齢者の皆さんが住み慣れた地域でふつうに暮らしていくことの大変さをつくづく感じてきました。

行政の役割は、多くの人がふつうに暮らすお手伝いをすることだと思います。介護予防や見守り支援、居場所づくりや生きがい支援など、決して派手ではない取組み、多くの高齢者の皆さんにとって当たり前のサービスを丁寧に作り上げていくことこそが大切なんだと思います。私にとってコロナ禍は、そんな当たり前のことを改めて思い起こさせてくれる3年間でもありました。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。